

幼児期・児童期前期の親子の相互作用と青年期での親への愛着の関係

— 自由記述による検討 —

丹羽 智美¹⁾

問題と目的

愛着とは愛着対象との間に作られる情緒的絆のことである。これは、愛着対象との相互作用により作成される。その際に重要なのが、愛着対象の近接可能性や応答性である。近接可能性とは、必要なときに子どもの近くに愛着対象がいるかどうかである。応答性とは、子どもの出すサインに対して愛着対象が適切な援助をするかどうかである。愛着対象の利用可能性や応答性が低ければ、自分は必要のない、助けられたい愛されたいに値しない存在だと思ってしまうようになる。そして、愛着対象は必要なときに援助してくれる存在ではないと思ってしまうようになる。このようにして、自他の有効性への確信を形成していく。それが内的作業モデル (Internal Working Model : IWM) である。この内的作業モデルに基づいて状況の解釈や行動の予測、行動のプランニングをするようになる。このような内的作業モデルは、6ヶ月から5歳くらいまでの段階での経験を特に重要視しており、そこから長ずるに従って内的作業モデルは可塑性を減じていくとした (Bowlby, 1973)。

このように、愛着対象とどのような相互作用をしたかが愛着の様相を規定するといわれている。Stern (1985) は、愛着対象との類似した個々の体験は一般化され、それらがさらに集結して、より大きなレベルで概念的に表象化されたものが愛着対象に対する内的作業モデルになると述べている。また久保田 (1993) も、内的作業モデルの主要な基礎となっているのは、圧倒的に環境や自己についての貯蔵情報であり、これらの情報の多くは個人の過去体験に由来していると述べている。つまり、これまでの親子の相互作用に関する具体的経験が土台になって親への愛着は形成されていることがわかる。

そのようなこれまでの親子の相互作用に関する記憶を利用して成人の愛着の様相を測定しようとしたのが

AAI (Adult Attachment Interview) である。AAIでは子どもの頃の両親やそれに準ずる人との関係に関する語りの内容と語り方を扱う。そのなかでも、語り方に重点をおいている。自分自身と養育者との関係性に関わる過去の記憶に対していかに容易にアクセスが可能かという次元と、正負様々な感情価を伴った異質な記憶ユニットをいかに整合的に結び合わせ得るかが語り方に現れる。それは、語りの構成の仕方が内的作業モデルによって規定されるからである (遠藤, 2006) と述べられている。

反対にその語りの内容に注目したのが山岸 (2004) である。山岸 (2004) は過去の愛着経験の内容から現在の対人的枠組み (IWM) との関連を検討した。AAIと異なり、過去の愛着経験を生育史の記述からとらえていることから、語り方というよりも語る内容を選択するという側面が強い (山岸, 2004)。しかし、良好な対人的枠組みを持っている人はよい愛着経験を思い浮かべることが示されたことから、現在よい対人的枠組みを持っている人はよい関係に関する過去の記憶を想起しやすいことがわかる。

ところが、想起された過去の自分に関する記憶が実際に経験された記憶ではない可能性が自伝的記憶の研究から指摘されている。想起する時点で過去の記憶が再構成されるために、変化や安定性についての暗黙理論、特性自尊心、動機や目標、ムード、想起に伴う主観的経験、想起の視点といった要因によって変容する (工藤, 2008)。そのため、回顧的な方法は実際にあった過去をとらえられているか疑問視されるという問題をもっている。

確かに回顧的な方法は実際にあった過去を正確にとらえていない可能性は否定できない。しかし、想起した本人の内的世界での経験が想起内容に現れているのではないと思われる。そして、内的世界の方が現実世界よりもその人の精神的健康や行動、態度に与える影響力が大きいことが知られている。そのため、想起内容が想起時に一時的にその場で再構成されたものであり、実際の過去を反映しているわけではなくとも、それはその人にとっては今の自分を反映した内容になると思われる。

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科大学院研究生
(指導教員：速水敏彦教授)

そのため、回顧的な方法であっても、今のその人の内的世界での経験を抽出することは可能であろう。

そして、親子関係に関する内的世界での経験は、信念となっている親への愛着を強化するものになっていると考えられる。つまり、信念という形で抽象化されている親への愛着であるが、親子関係に関する記憶をたどれば愛着の様相を反映した経験にアクセスしやすくなっていると考えられるためである。例えば佐藤 (1998) は、AAIに基づく愛着スタイルによって愛着システムが活性化されたとき、どのような過去の記憶内容へアクセスするかは異なることを述べている。そこで、本研究では親への愛着の示し方によって幼少期の親子の相互作用がどのように異なるかについて検討する。親への愛着によってアクセスされる記憶内容が規定されているのならば、アクセスする記憶内容の偏りを修正するような働きかけをした場合、愛着システムが活性化したとき表出される行動や感情の修正が可能になるかもしれない。ひいては愛着の変容につながる可能性も考えられる。Papini, Roggman & Anderson (1991) は、親への認識が変わることによって青年の親への愛着が変化することを示していることから、アクセスする記憶内容の修正による愛着の変容可能性は全く無いとはいえないと思われる。

過去の親子の相互作用については、Bowlbyが6ヶ月から5歳くらいまでの段階を重視していることから、幼稚園や保育園に通っている時期 (幼児期) と小学校低学年の時期 (児童期前期) に焦点を当てることにする。3歳くらいまでの記憶は想起することは困難であることが知られているため、過去を想起できる幼少期の時期としては妥当であると思われる。

また、親への愛着については愛着スタイルではなく、本研究では次元論的にとらえることにする。Brennan, Clark & Shaver (1998) において、愛着は愛着対象からの接近回避 (Avoidant) と愛着対象からの応答に対する不安 (Anxiety) でとらえられることが示された。このとらえかたは最近よく使用される傾向にあり、その有用性が指摘されている (中尾・加藤, 2004)。また、それらの次元によって愛着スタイルがとらえられることも確認されている。

以上より本研究では、次元論的にとらえた親への愛着の様相によって、想起した過去の親子の相互作用の内容がどのように異なるかについて比較検討する。愛着スタイルによる想起内容はAAIによって示されているが、次元論的にとらえた親への愛着の様相は検討されていない。AAIによる想起内容は次元の影響によるものか、次元の相互作用によるものかを確認する一助になると思われる。

方法

調査協力者

大学生336名 (男性68名:平均年齢19.50/SD0.74, 女性268名:平均年齢18.36/SD0.80)。

調査時期

2001年6月下旬から7月上旬

調査内容

親への愛着尺度 丹羽 (2005) による親への愛着尺度の「愛着回避」9項目、「愛着不安」8項目の計17項目を使用した。愛着は愛着対象への接近回避 (Avoidant) と愛着対象の応答性への不安 (Anxiety) でとらえられる (Brennan et al., 1998) ことから、親に対してこの2側面で作成された尺度を用いた。回答方法は、とてもあてはまる(5)から全くあてはまらない(1)までの5段階評定であった。

過去の親子の相互作用に関する自由記述 幼稚園・保育園に通っている頃 (幼児期)、小学校低学年の頃 (児童期前期) の子どもの行動や態度に親がどのように接してくれていたか、また、それをどのように感じていたかについて、できるだけたくさんの記述を求めた。

結果

山岸 (2006) の評定基準を一部改変して自由記述の評定を行った。評定基準をTable 1に示す。筆者と心理学を専攻する大学院生1名とで独立して評定を行い、一致率を求めたところ、幼児期では86.71%、児童期前期では84.67%であった。不一致であったところについては、合議に基づく再評定を行った。各セルの人数が少ない部分があるので、大カテゴリーである“安定した良好な関係”“問題や葛藤がある関係”“関係性が希薄”で分析を行った。1人に複数の記述がある場合、同じカテゴリーに入る記述は1つとカウントした。そして、親への愛着を愛着不安と愛着回避それぞれ平均値未満を低群、平均値以上を高群と群分けし、親への愛着の高低群での自由記述数の比較を行った。

1人に複数の自由記述があり、それらが異なるカテゴリーに分類される場合があるので、各カテゴリーで2項検定を行った。まず、幼児期の記述についてみていった。愛着回避高低群における自由記述数をTable 2に示す。各カテゴリーについてそれぞれ2項検定を行った結果、“安定した良好な関係” ($\bar{x}=2.00, p < .05$) と“関係性が希薄” ($\bar{x}=1.69, p < .05$) で有意差がみられた。愛着回避低群は“安定した良好な関係”の記述が多く“関係性が希薄”である記述が少なかった。愛着回避高群は、“関係性が希薄”である記述が多く、“安定した良好な関係”の記

Table 1 自由記述の評定基準（山岸（2006）を参考に作成）

分類カテゴリー	例
A. 安定した良好な関係	
各時期に応じた安定した愛着関係をもち、安定のベースを提供されていると感じている。 A程度ではないが問題や葛藤が見られないもの。 (具体性が見られないもの)	「なにか嫌なことがあれば必ず母親のところに逃げて、やさしい声をかけてくれると元気になるという感じだった」
B. 問題や葛藤がある関係	
反発, 反抗	「いわゆる反抗期だった。親の言うことを聞かず、精神的にとっても不安定だった。」
親の統制, コントロールが強い, 厳しい	「親に門限を決められていて門限を守らないと家に入れてもらえなかった。その頃は反抗せずに言い訳を考えては嘘をついていた。」
分離不安, しがみつ	「母が戻ってこなかったらどうしようと思っていた。だから母が夜出かけるときは必ず一緒についていった。」
愛情欲求 (そばにいてほしい, 寂しい, 構ってほしい)	「いつも母親は妹のそばにいて、母親をとられているみたいで嫌だった。ずっとそばにいてほしかった。」
愛されていない, 拒否されている (葛藤を感じている)	「兄ばかりで家族が私の存在を認めていないようでいやだった。」
回避, 嫌悪, 意味を認めない	「母親が働き始め週末も遊びに忙しく、あまり家にいなかった。家に誰もいないことが嫌でその寂しさが母親への嫌悪に変わっていった。母を『母親』という存在として認めず、『ただ一緒に住む忙しい人』として冷めた目で見ようとしていた。」
C. 関係性が希薄	
愛されていない, 拒否されている (情緒的に離れ, 回避)	「母はストレスがたまっていたのか、いつも誰かに対してぐちぐち言っていました。子供に対しても、父に対しても、悪口を言っていた。いやだったし、家を出て行ってほしかった。」
情緒性が少ない (記述はあるが, 情緒が少)	「手がかからない子ども。放っておかれたことに対し、仕事で忙しいからしょうがないと思っていた。」
他の対象に愛着を向ける	「両親との思い出がなく、おばが自分の母親的存在だった。とても可愛がってくれ、母親よりも信頼していた。」

Table 2 愛着回避高低群における幼児期の親子の相互作用

	1. 安定した良好な関係	2. 問題や葛藤がある関係	3. 関係性が希薄
愛着回避低群	142 (67%)	40 (57%)	9 (43%)
愛着回避高群	70 (33%)	30 (43%)	12 (57%)
	212	70	21

Table 3 愛着不安高低群における幼児期の親子の相互作用

	1. 安定した良好な関係	2. 問題や葛藤がある関係	3. 関係性が希薄
愛着不安低群	125 (59%)	33 (47%)	11 (52%)
愛着不安高群	87 (41%)	37 (53%)	10 (48%)
	212	70	21

Table 4 愛着回避高低群における児童期前期の親子の相互作用

	1. 安定した良好な関係	2. 問題や葛藤がある関係	3. 関係性が希薄
愛着回避低群	133 (68%)	46 (50%)	4 (31%)
愛着回避高群	62 (32%)	46 (50%)	9 (69%)
	195	92	13

Table 5 愛着不安高低群における児童期前期の親子の相互作用

	1. 安定した良好な関係	2. 問題や葛藤がある関係	3. 関係性が希薄
愛着不安低群	109 (56%)	51 (55%)	5 (38%)
愛着不安高群	86 (44%)	41 (45%)	8 (62%)
	195	92	13

述は少なかった。

愛着不安高低群における自由記述数を Table 3 に示す。各カテゴリーについてそれぞれ2項検定を行った結果、愛着不安高低群間でどれも有意差はみられなかった。

次に児童期前期の記述についてみていった。愛着回避高低群における自由記述数を Table 4 に示す。各カテゴリーについてそれぞれ2項検定を行った結果、愛着回避高低群間で“安定した良好な関係” ($z=2.27, p<.05$)と“問題や葛藤がある関係” ($z=1.85, p<.05$)と“関係性が希薄” ($z=1.87, p<.05$) において有意差がみられた。愛着回避低群は“安定した良好な関係”の記述が多く、“問題や葛藤がある関係”と“関係性が希薄”である記述が少なかった。愛着回避高群は、“問題や葛藤がある関係”と“関係性が希薄”である記述が多く、“安定した良好な関係”の記述は少なかった。

愛着不安高低群における自由記述数を Table 5 に示す。各カテゴリーについてそれぞれ2項検定を行った結果、愛着不安高低群間でどれも有意差はみられなかった。

考察

愛着回避における親子の相互作用の差異

幼児期と児童期前期ともに愛着回避高群の方が愛着回避低群よりも“安定した良好な関係”の記述数が少なく、“関係性が希薄”な記述が多かった。愛着回避の高い人は、ストレスフルな時に接触や助けを求めるにもかかわらず、拒否や嫌悪を示すような親子の相互作用を幼少期から繰り返し経験してきている(繁多, 1987)。そのため、“関係性が希薄”な過去経験に関する記憶内容にアクセスしやすくなっていると考えられる。それに伴って、“安定した良好な関係”に関する記憶にはアクセスしにくくなっていたと思われる。

一方 Bowlby (1980) は、回避的な親の応答を経験した

人は親からの拒否を想起させる否定的情報を回避すると述べており、今回の結果とは一致しなかった。なぜ親からの拒否を想起させる否定的情報を回避するかについて Bowlby (1980) は、それによる葛藤や混乱を回避するためであると述べている。幼少期においてストレス状況により愛着システムが活性化した結果、親への接近・接触や助けを求める。しかし、それに対して拒否的な反応が返ってきた場合、強い葛藤や混乱を経験する。そのような経験を何度もしていると、それを回避するために、そのうち愛着システムが活性化するような情報を一切排除するようになる。このような防衛的な情報処理のしかたが以後の愛着関係に関する場面でもとられるようになる。

本研究では、愛着回避の高い人は“関係性が希薄”な記述が多かったという否定的情報への想起の多さが特徴としてみられた。しかし、ここで想起された記憶は、葛藤や混乱を呼び起こさない程度の親子の相互作用に関する記憶だった可能性が考えられる。Bowlby (1980) が指摘した、葛藤や混乱に至るような親子の相互作用に関する記憶にはアクセスしにくく、ここでは想起されていない可能性はあるだろう。

そして、“関係性が希薄”な記述内容は、親と距離をとり、親に関して意味を見出さないような記述である。親への愛着回避を主特徴とする愛着軽視型の AAI での語りでも、幼少期の親との愛着関係が今の自分に影響を与えていないと語る特徴がある(遠藤, 2006)。このことから、愛着軽視型の特徴が結果に出てきていたと考えられる。以上のことから、愛着回避の高い人の傾向は自由記述に現れていたと考えられる。

そして、“問題や葛藤がある関係”に関する記述は、児童期前期においては愛着回避高群の方が愛着回避低群よりも記述が多く、幼児期では有意差はみられなかった。それは発達段階における親の接し方の違いが関係してい

る可能性が考えられる。幼児期はしつけに関する記述が多く、それに対してこわかった、いやだったと記述されていた。また、弟妹が生まれてさみしい思いをしたという記述も多かった。このように、しつけと同時に弟妹の生まれるタイミングが生じやすかったこともあり、愛着回避高低群で違いが見られにくかったのだろうと思われる。対して児童期前期になると、兄弟姉妹間での親の対応の差に対する不平等感や門限などの家庭のルールの厳しさへの抵抗感などが多くみられた。このように、各家庭での対応に差が目立ちやすくなったと思われる。そして、子どもにとっての親の対応への不満は、親は信用できないといった親に対する価値を低めることになったと考えられる。そのため、愛着回避の高い人は親の対応への不満に関連する過去の記憶にアクセスしやすくなり、児童期前期での愛着回避高低群間で記述に差がみられたのだろう。

愛着不安における親子の相互作用の差異

幼児期、児童期前期ともに愛着不安高低群間で記述内容に差はみられなかった。愛着不安の高い人は、親の子どものシグナルに対する敏感性に問題があり、親から一貫した支援を受けにくかった経験を持っている(繁多, 1987)。そのため、AAIにおいてとらわれ型の人は辛かった過去の愛着経験を比較的多く想起しやすい(遠藤, 2006)。とらわれ型は愛着不安を主な特徴として持っているため、とらわれ型の示す語りや反応は愛着不安の高い人の特徴をみる上で参考になるとと思われる。しかし、本研究ではとらわれ型の示す語りや反応とは異なる結果がみられた。一方、山岸(2004)では現在の不安な対人的枠組みは過去の母親との関係と関連がみられておらず、本研究と同じ結果が出ていた。

このような結果の違いについては、AAIと生育史ででてくる内容の差異が結果に関係していると考えられる。AAIは愛着システムが活性化するように構成されており、それによって特徴的な反応がみられやすいと思われる。対して過去の親子の相互作用について記述を求める調査形式では、愛着システムが活性化するとは限らない。そのため、AAIと自由記述形式では出てくる内容が異なると考えられる。

また佐藤(1998)は、とらわれ型の人が置かれた状況によって行う情報処理のしかたの差異を次のように述べている。とらわれ型は、愛着対象に関する肯定的な新しい情報が提示されている時は楽観的な愛着対象のモデルが活性化し、それによってその場の情報処理がガイドされるが、愛着対象に関する否定的な新しい情報が提示されている時は悲観的な愛着対象のモデルが活性化し、それによってその場の情報処理がなされる。そして、とら

われ型は同一対象について複数の相対するモデルの間のネットワークが切れている。そのため、肯定的なモデルによって緩衝されることなく、悲観的なモデルの側面で情報処理がなされることによって、つらかった経験を多く想起しやすいのである。

このように、その場の状況によって肯定的なモデルが活性化されるか悲観的なモデルが活性化されるかは異なると考えられる。例えば親と喧嘩をしている最中であったり、反対に楽しく親と旅行に行った直後であったりすると、それに影響されて想起する過去の記憶内容も変わるとと思われる。そのため、愛着不安高低群間で記述の差がみられなかったのだろう。

引用文献

- Bowlby, J. (1973). *Attachment and Loss: Vol.2: Separation: Anxiety and Anger*. New York: Basic Books.
(黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子(訳)(1998). 母子関係の理論Ⅱ: 分離不安 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and Loss: Vol.3: Sadness and Depression*. New York: Basic Books.
(黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子(訳)(2003). 母子関係の理論Ⅲ: 愛情喪失 岩崎学術出版社)
- Brennan, K.A., Clark, C.L. & Shaver, P.R. (1998). Self-Report Measurement of Adult Attachment: An Integrative Overview. In Simpson, J.A. & Rholes, W.S. (eds.) *Attachment Theory and Close Relationships* (pp.46-76). New York: Guilford.
- 遠藤利彦(2006). 語りにおける自己と他者, そして時間—アダルト・アタッチメント・インタビューから逆照射して見る心理学における語りの特徴— 心理学評論, 49, 470-491.
- 繁多 進(1987). 愛着の発達-母と子の心の結びつき- 大日本図書
- 久保田まり(1993). 対人関係の表象モデル—内的ワーキング・モデルという概念について— 秋田経済法科大学法学部紀要, 18, 21-43.
- 工藤恵理子(2008). 現在の私につくられる過去の“私”—想起された過去の自分に関する社会的認知研究— 心理学評論, 51, 82-94.
- 中尾達馬・加藤和生(2004). 成人愛着スタイル尺度(ECR)の日本語版作成の試み 心理学研究, 75, 154-159.
- 丹羽智美(2005). 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程 パーソナリティ研究, 13, 156-169.
- Papini, D.R., Roggmen, L.A. & Anderson, J. (1991). Early-

- adolescent perceptions of attachment to mother and father: A test of the emotional-distancing and buffering hypotheses. *Journal of early adolescence*, 11, 258-275.
- 佐藤 徳 (1998). 内的作業モデルと防衛的情報処理心理学評論, 41, 30-56.
- Stern, D.N. (1985). *The interpersonal world of the infant*. New York: Basic Books.
- 山岸明子 (2004). 女子青年がもつ現在の対人的枠組みと生育史に記述された母親及び友人との関係の質との関連 発達心理学研究, 15, 195-206.
- 山岸明子 (2006). 対人的枠組みと過去から現在の経験のとらえ方に関する研究 風間書房 (2008年11月5日受稿)

ABSTRACT

The relations between description about parents-child relationships in preschool and elementary school period and parental attachment in adolescence.

Tomomi NIWA

This study aimed to examine the difference of parents-child relationships in preschool and elementary school period between parental attachments in adolescence. These aspects were investigated among college students ($n = 336$) who were surveyed using a questionnaire and description. The questionnaire investigated parental attachment. And description investigated parental attitude to children in preschool and elementary school period. The main results were as follows: those high on avoidance of parental attachment had more descriptions of "secure relationships" than those low on avoidance of parental attachment. And those who were high had less description of "valueless to relationships" than those who were low. However there were no differences of descriptions between those who were high on anxiety of parental attachment and those who were low. These results were discussed in relation to attachment and information processing.

Key words: parental attachment, parents-child relationships, adolescence